



東京・渋谷駅前の忠犬ハチ公像は待ち合わせ場所として有名である。進学のため大田原市から上京した42年前、ハチは亡くなつた飼い主の帰りをここで10年間待ち続けたという話を聞き、「そんな人がいるのか」といふかしき思った。東京大農学部の農地工学という講義で、ハチの飼い主は東大の上野英三郎教授で、日本の農業土木学の創始者であることを知った。講義の担当教授は「ハチ公は忠犬だと思つておられるでしょ?」と問い合わせてきた。上野教授は子犬のハチを連れ、渋谷駅前の焼き鳥屋で農林省役人の教え子たちと農地整備についてよく

議論していたそうだ。「腹をすかしたハチがクンクン鳴くので焼き鳥屋のおやじが残飯をあげていたらしい。私も学生の時に先生から聞いた話ですがね、フフフ」と笑つた。ハチの飼い主が東大教授であつたことは農業土木を学んだ卒業生には常識だったが、

除幕式には、上野教授が亡くなつた後の老犬ハチに実際に触つたことのある86歳のおばあちゃんも招待された。私はこつそりと「ハチ公は焼き鳥が好きだったと聞いたこと

してハチの命日から80年目の2015年3月8日に銅像の除幕式が行われるに至つた。除幕式には、上野教授が亡くなつた後の大農学部正門に入つて左手にある。正門右の農学資料館には死後に解剖されたハチのホルマリン漬け臓器と剖検記録が展示されている。解剖の状況を記した剖観の7行目には「胃二ハ内容白色ノ糊様物ト

5枚位ノ長サ太サ5ミナル竹串先銳ナルモノ3本鈍端ナル

ハチの死因はフィラリアとされていたが、臓器を再検査したところがんを患つていたことが2011年に分かった。このように科学や歴史の新発見に記録や試料などの1次データは不可欠である。私たちは、人間の都合で作った2次データの物語ではなく、客観的な1次データに基づいて真実を語らなければならぬ。名簿というデータを破棄したとされる「桜を見る会」。さて、私たちに今年の桜はどう見えるのだろうか。

眞実は1次データに宿る

特に宣伝することもなかつた。それが東日本大震災直後、文学部哲学科の教授が死どつてゐるところが、そのうちのうちに調べてゐるうちにその事実を知り「ハチ公と上野英三郎博士の像を東大に作る会」の結成を発案した。これ幸いと私たち卒業生も加わり寄付金集めを始めた。そ

があるのですが本当ですか」と尋ねた。すると「そうなのよ、私はハチ公が大好きでねえ、帰宅した父に毎日『今日はハチ公どうしていた?』と聞くと『今日も焼き鳥屋にいたよ』と言つていたわねえ」と懐かしそうに話した。

ハチと上野教授の銅像は東

モソ1本存在ス」とある。ハチ(1923~35年)は日本の軍国主義の時代を生きた。34年には全国の児童が学ぶべき教材として尋常小学校2学生の修身の教科書に「オニヲ忘レルナ」という忠犬ハチ公物語が掲載され、銅像にもなつた。その銅像とハチが並んだ写真も残つている。一方で単に焼き鳥屋に通つてただけだという説もあり、人によつて評価が異なる。